

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA天神南601号
TEL 092(731)2372
FAX 092(731)2373

No.154

2022年12月7日

〈URL〉 <http://www.peshawar-pms.com> 〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



[写真] 9月15日のガンベリ記念公園

| | |
|--|------------|
| ドクターサーブ中村は心の支え—堅実に進むPMS事業 | ジア ウル ラフマン |
| 中村医師の事業と希望は引き継がれた—しかし、アフガニスタンの危機は続く | 村上 優 |
| ◎会報アーカイブ 早魃の中、百年に一度の大洪水 | 中村 哲 |
| ◎パキスタン大洪水・被災地支援報告 被災者にシェルターと食糧を! —ペシャワールから | イクラムラ カーン |
| 「菜の花基金」からの感謝とご報告 | 伊藤正之・伊藤順子 |
| 「菜の花基金」のご寄付について | 村上 優 |
| 若き日の中村哲医師 | 宮崎信義 |
| 【カラー報告】 バルカシコート事業完了!! | |
| バラコット用水路事業、始動 | |
| 大洪水、その後 | |
| ガンベリ農場 収穫の秋 | |
| ドクターサーブ中村とともに | |

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、現在は中村医師が設立したPMS(平和医療団・日本)のアフガニスタンでの医療活動や灌漑水利事業等の総合的農村復興事業を支援しています。

ホームページはこちらから▶



温かいパンの一切れを分かち合おう

「餓えた人々に温かいパンの一切れを分かち合おうとする真心だけが、励みであり、信ずるに足ることです。生殺与奪の権を握る自然の大河は、轟轟と流れ、真っ白な水しぶきをあげて岩に砕け散る。それが何かを語るようです。人を欺かぬメッセージに耳を傾けます。良いクリスマスと新年をお迎え下さい。」

——中村 哲 (ベシャワール会報114号、2012年)

ドクターサーブ中村は心の支え

—— 堅実に進むPMS事業

PMS (ピース・ジャパン・メデイカル・サービス) 副院長/ジャララバード事務所所長 ジアウルラフマン

皆さま、お元気で過ごしてはいかがでしょうか。いつも私たちをお支え頂き、心から感謝申し上げます。

今月はドクターサーブ中村の亡くなられた日を迎えます。

今日はドクターサーブに現在のPMSの活動をご報告するとともに、どんな状況にあっても変わらず私たちアフガン人を支援して下さっている日本の皆さまへのご報告とさせて頂きたく存じます。

用水路建設完工と新規事業の始まり

まず大きな出来事として、ドクターサーブがPMS職員に、調査から設計、建設、施工管理まですべてを自分たちでやるようにと指示されていた「バルカシコート堰・用水路の建設」を、計画通り九月末に無事終えました。着工寸前にドクターサーブが突然いらっしやらなくなりましたので、PMSは初めて文字通り自分たちだけで取り組

みました。日本側では技術支援チームが結成され、私たち、特にPMSの技術者たちへ様々なアドバイスをしてくれました。

昨年八月の政変時には我々も他のNGO、企業、国連と同様に活動資金が銀行から引き出せなくなり、さらにアフガンへの送金を各国の銀行が停止したため、灌漑事業は二カ月間進めることができなくなりました。私たちはガンベリ農場の収穫物からの収入を重機の燃料費に充て、防風林の樹木を伐採し、材木や薪として売却。何とか資金を工面して工期内に完工することが出来ました。

去る十月五日に開催された完工式にはバルカシコートの村人はもちろん、州政府からは経済・農業灌漑局の役人などの出席もあり、喜びを分かちあいました。

次に、十月に着工した新規灌漑事業について報告いたします。ナンガラハル州南部のコット郡バラコット地区で、スピングル



山脈を水源とするコット川とその周辺の湧水から水を引く用水路建設計画です。灌漑地は約一二〇〇〜四五〇ヘクタールが見込まれ、幅一・五m、全長約四・三kmの小規模な用水路が建設されます。

この地は二〇一六年、戦争でほとんどの家屋と農地が破壊され、村民は難民化を余儀なくされました。戦いが収まったところ村に戻り、家を造り直し、荒野と化した畑を耕してはみたものの、うまくいきません。さ

らに、行き場のない人が増えて農地に家を建てざるを得ず、耕作が難しくなっていました。

PMSはこの惨状をみて彼らの所有する荒地を灌漑する計画を立案し、日本側と協議を重ね、この度着工の運びとなったのです。この計画を喜んだのはコット郡の住民だけではないようで、十月十六日の起工式にはナンガラハル州から副知事をはじめ関係各局の代表たちも出席しました。

工事に関しては、現在取水堰や用水路建設現場までの交通路を敷設中です。現場は斜面で勾配が厳しい場所もありますので、安全に充分留意しながら進めています。

大洪水

今年、八月に大洪水が発生しました。アフガニスタン二十数州での豪雨のみならず、熱波による氷河の融解も原因と言われています。

クナール河とカブール河の水位が信じられないほど上昇しました。政府の報告書によるとクナール河の流量が毎秒一九五〇m³にもなったとのこと。しかし、PMSが建設したどの堰も機能が保たれ、洪水の後に必要な水量が取水できており、あらためて斜め堰の素晴らしさに驚きました。河の水が引いた冬期に各堰を観察し、修復工事を始める予定です。

護岸堤ではカシコート、マルワリードII、ミラーン及びベスードの河岸で洗掘が発生、石出し水制が流失したところもありました。いずれも改修工事を早急に開始しています。

ダラエヌール診療所

大洪水に伴い、ダラエヌール診療所では、水溶性の下痢患者が通常の二倍以上に増加しコレラの発生を心配しました。検査キットが手に入らないため都市部の病院へ移送しましたが、コレラではありませんでした。いつコレラが発生しても応急処置ができるよう、点滴等を多めに備えました。十月に入り、診療所では下痢患者が減少してきましたので一安心です。

ナンガラハル州南部のシンワリ地方の三地区ではコレラが流行しましたが、政府が早急に北欧などの支援団体の協力のもと、医療チームを派遣して治療に取り組みました。パクティカやパクティア、クンドウース、タハール各州でも発生しましたが、現在は落ち着いています。

PMSの診療所では近年助産師と助手、妊産婦の家族の協力で診療所内での出産が可能になってきました。助産師とその助手は来院する女性患者たちの相談にも応じており、心強い存在となっています。

昨年はコロナウイルスのデルタ株が蔓延し、我々の診療所に呼吸困難を訴える患者



8月の大洪水で巨礫の移動が見られるが、機能を保っているバルカシコート堰。(2022年11月5日)

が押し寄せていましたが、今では感染疑いの症例は減少しています。政府によるワクチン接種が継続され、診療所の管轄^{かんかつ}地域では全住民が接種したことが功を奏したと考えられます。

ガンベリ農場

—— サツマイモやナツメヤシの収穫

農業部門では、昨年入職した五人の青年たちも熱心に業務に励んでいます。ガンベリ地区の長老たちとの会合も毎月開催しています。同地区の農業は豪雨と洪水から守られましたが、周辺住民は洪水の被害を受

けました。

農場では十月に米の収穫を終え、約四〇ヘクタールに小麦の種を蒔く準備をしています。

二〇一七年にドクターサーブ中村が日本大使館からの草の根無償支援で栽培を始めたナツメヤシの初収穫が叶い、現在農場事務所乾燥させています。職員や作業員たちと食べる予定です。本格的な収穫が見込める来年からは出荷する計画です。

また、今年には干ばつ下の救荒作物としてサツマイモの試験栽培を行なっています。十月末に立派な芋が収穫され、農場で火を焚き焼いて食べました。作業員たちはツルを自分の村でも植えつけており、彼らの口に合えばサツマイモが広がるのは案外早いのではないかと期待しています。

九月から始まった柑橘類の収穫は来年二月頃まで続きます。このほか、農場では養蜂や畜産もドクターサーブ中村がいらっしやった時と同じように継続しております。

ジャララバードのPMS事務所について

最後になりましたが、我々の事務所についてのご報告です。

私たちはドクターサーブ中村と築き上げた通り、医療、灌漑、農業の三事業がスムーズに進められるよう日々努めています。幾つかの例をあげます。

各事業地への燃料（発電機や重機、ワークシヨップなどで使用）配給は、燃料を管理するチームが事務所から現場へ運び、使用量を確認して給油を行ないます。同時に、現場に問題はないか、改善点はないかなど、様々な情報を収集し、事務所へ持ち帰ります。また、活動地域で雇っている作業員の数や作業内容の確認を毎日行ない記録します。この記録は日本へも報告されます。

各現場に必要な資機材の見積り、購入、運送までの一連の作業や、銀行からの出金換金、作業員への労賃の支払い準備などもあります。これらの部署では特に問題なく、担当の職員たちが注意深く進めています。我々事務所の重要な役割の一つとして、活動の月間報告書をまとめ、州政府の關係局に提出することが挙げられます。毎月滞りなく提出するよう努力しています。

最近では、カプールの経済省に向き、以下の三つの手続きを済ませました。

① 前政権から承認を得ていた二〇二一年～二〇二三年までのPMSの事業予算書を提出。現政府の承認を受ける。

② PMSの「マルワリード堰・用水路改修計画」の工期を一年延期する許可を得た。これは、今年の大洪水を受け、堰や護岸の修復工事に時間を割く必要があるためです。

③ ②に伴い、堰・用水路の維持管理の予

算修正を申請。

昨年八月の政変以降も政府との関係は良好です。また活動地ではPMSと住民との月一回の協議が継続されており、現在トラブルもなく良好な関係が維持されています。

ドクターサーブ中村広場の完成

ジャララバード市内にドクターサーブ中村の記念碑が建立され、広場が造られました。州政府から「PMSが気に入っている

ドクターサーブの写真を二枚欲しい」との連絡を受けて届けました。まさか手渡した写真があのように大きく、それも両面に掲げられるとは思っておらず、本当に驚きました。十月十一日のオープニングセレモニーにはPMSも招かれ、数名が出席しました。記念碑はPMSの活動地へ往き来する時に必ず通過する場所に造られたので、我々は毎日ドクターサーブを目にし、ご挨拶できるわけです。ガンベリ公園の記念塔と共に、

中村医師の事業と希望は引き継がれた

——しかし、アフガニスタンの危機は続く

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長／ベシャワール会会長 村上 優まさる

はじめに

中村哲医師は二〇一九年十二月四日に亡くなりました。悲報の直後にPMSとベシャワール会で確認した誓いは、三年を経た今、実現できたのでしょうか。力と勇気を与えてくださった支援者の皆様に感謝を述べ、検証する機会とします。

中村医師が繰り返し「そしてアフガニス

タンは忘れられていった」と語ったように、二〇二一年八月のタリバン復権後、アフガニスタンをめぐる喧噪は過ぎ去り、干ばつは無視されたまま、時に女子教育の遅れについて報道されるだけとなりました。

しかし欧米による経済制裁は厳然と継続し、アフガニスタン経済の混乱は危険水準にあるままです。銀行送金はドル建てでアメリカを経由する必要があるために、またい

この記念碑を見るアフガンの多くの人々は、ドクターサーブのお働きを想い、それが心の支えになっているように感じています。全般的にナンガラハル州の治安は良好ですが、昨年来の米国による経済制裁は解かれず、雇用機会もなく、銀行機能も未だに不十分で、日々物価が高騰し、アフガンの人々は苦しんでいます。

皆さまのご支援にPMS一同、心からの感謝を申し上げます。

つ制限が強化されるか案じられる日々です。未だアフガニスタン・イスラム首長国(タリバン政権)を承認する国は数少なく、大国への思惑からか、イスラム諸国協力機構(OIC)に属する国からの承認も進んでいません。救いは在アフガニスタン日本大使館が欧米諸国に先駆けて一部再開し、交流の窓口ができたことです。

治安は大きく改善しても、ISや軍閥の動きは散発しています。地震や、温暖化による干ばつと洪水が息継ぎもなく襲っています。その結果、深刻な飢饉が危惧されています。

それでもアフガニスタンの人々はずっと地を這うように生き続けているのです。少なくともPMSが活動しているナンガラハル州では懸命に働いている人々の笑顔を見ることができま



ガンベリ農場で収穫されたレモンの選別作業。(2022年9月27日)

PMSの事業

①医療 ダラエヌール診療所では医療スタッフが活発に働いています。中村医師が亡くなっても、タリバン政権になっても、新型コロナウイルスが猛威を振るっても、干ばつによる飢餓が来ても、洪水や、その結果の汚い水に起因する下痢症(コレラを心配した)が増えても、工夫をし助け合っており、そして日本からの支援によって、この地にある人々の命を支えています。ナンガラハル州の多くのクリニックは一時期危機に瀕

し、今でも十分には機能を回復していません。そのなかでダラエヌール診療所は変わらぬ診療を続けて、人々に安心を届けてきました。今年一月末にはナンガラハル州南部の食糧配給を医療チーム中心で行ないましたが、今度はユニセフに協力して地域の重症栄養失調児への支援を行なう準備を始めました。この冬のナンガラハル州全体での飢饉と食糧危機を注意深く見守り、必要があれば食糧支援を再開します。

②農業 ガンベリ農場二三〇ヘクタールの開墾が進み、防砂林をめぐらして砂嵐などを避けながら、マルワリード用水路からの水の供給を受けて農業は順調です。今年はお麦、米、レモンなどの柑橘類を収穫、ナツメヤシの実がなり、養蜂、酪農も堅調です。救荒作物サツマイモの栽培にも再挑戦しています。

二〇〇八年にダラエヌール渓谷の試験農場は大幅縮小を余儀なくされました。原因は干ばつの進行、事態を悪化させた軍事介入と独善的「復興支援」、これを支えた心ない者たちでした。しかし、中村医師はマルワリード用水路で潤うであろうガンベリ沙漠での「自立定着村」を構想し、難民が帰農する日を夢みました。この時の顛末は『アフガン農業支援奮闘記』(高橋修編/橋本康範・伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦史著、石風社、二〇一〇年)に記されており、サツマ

イモ誕生物語も登場します。希望は引き継がれたのです。

③灌漑 二〇二〇年に始まったバルカシコト事業は、九月に完工して大きな成果をあげました。ジア先生をはじめ、PMS技師団と日本のPMS支援室・技術支援チームが一体となって完遂しました。それを見守り後押しをしたのは支援者の皆様です。中村医師(PMS)が手掛けた十一の堰や用水路、その周辺の護岸の維持管理事業も並行し、住民もアシャル(奉仕活動)で用水路浚渫を実施し、達成感と感動を分かち合いました。バルカシコト堰に付帯して渓谷に設置した二七基の砂防堤は初めての試みですが、今年の豪雨にも土石流を緩流化させ、一定の成果を上げました。

一つの成功は次への期待と、取り組むべき動機につながります。二〇二二年十月よりナンガラハル州のコット地区で、約四・三kmにわたる用水路を引いて灌漑する工事が始まりました。難工事が予想されますが、住民からの期待に後押しされて手掛けることになりました。

また、PMS方式灌漑事業の候補地としてゴシュタ(ナンガラハル州)とヌールガル(クナール州)などがあり、来年度の着工に向けて選定されます。この事業はJICA(国際協力機構)/FAO(国連食糧農業機関)/PMSの共同事業になる予定で調整され

ています。

ヒンドウークシュ山脈周辺の干ばつと洪水

今年の干ばつと洪水のありさまは二〇一〇年のそれを思い起こさせます。同じようにモンスーンの影響を受けた豪雨で、アフガニスタンに大きな被害を与え、パキスタンでも更に大きな爪あとを残しました。

被害を大きくしたのが「氷河湖決壊洪水」です。二〇一九年にネパールにある国際総合山岳開発センター（ICIMOD）が次の

会報アーカイブ（随時掲載）

早魃かんばつの中、百年に一度の大洪水（抜粋）

中村哲

*第一〇五号（二〇一〇年九月発行）

ように報告しました——地球温暖化でヒマラヤからカラコルム、さらにはヒンドウークシュ山脈に五万六千ある氷河が融解し始めており、二一〇〇年までにその六四％が融解して消失する——。

この氷河が貯えている淡水は北極・南極と並んで地球の気温安定に大きな役割を担っており、山脈地帯や川の流域で暮らす十九億人に水を供給し、食糧を提供する源です。中村医師も再三、山に降る雪の大切さを述べていました。

中村医師はベシヤワール会報一〇五号（二〇一〇年九月）で二〇一〇年洪水を報告しています。そしてこの洪水レベルを基準として堰や護岸工事を見直しました。そのため

に今回の洪水では、村々は大きな被害を免れました。二〇一〇年当時の中村医師の認識と危機感は今に生きているのです。

中村医師の一〇五号報告を再掲します。政治情勢を含めて、繰り返しアフガニスタンの苦悩と再生への意気込みをお読みください。

世紀の大洪水

（略）七月二七日に降り始めた雨は、断続的な集中豪雨を伴い、厚い雨雲が幾日も留まって梅雨のような状態でした。乾燥地ですから、初日は皆喜びました。しかし、例年と違うのです。

アフガンには雨季が二度あり、冬季と夏季にやってきます。このうち、土地を潤して農業の支えとなるのが冬の雨です。梅雨

のような小雨日が多く、小麦を育てるだけでなく、高山に雪を降らせ、万年雪を絶えず補充していきます。

「アフガニスタンではカネがなくとも暮らせるが、雪がなければ生きられない」という諺ことわざをいつも紹介しますが、この積雪が夏に解けだして河沿いに豊かな実りを約束してくれるのです。白い山の雪は巨大な貯水槽の役目を果たし、恵みの象徴です。近年の温暖化で、この雪が一気に解けて洪水と

濁水が同居し、農地の沙漠化が急速に拡大していることは訴え続けてきた通りです。

対照的に夏の雨は、局地的な集中豪雨が大半で、恵みより被害の方が多いように思われます。しかし、普通は夕立に近い通り雨で、長雨にはなりません。

ところが、今年は違っていました。インド洋に発する夏のモンスーンが巨大化して北上、カラコルム・ヒンドウークシュ山脈の北部と東部に大量の降雨を起こしました。インダス河の流域は、ことごとく大洪水となり、厚い雨雲が去りません。

私たちが関わってきたクナール河やカール河も例外ではありませんでした。降雨二日目から河の水位がぐんぐん上がり始めました。マルワリード用水路の取水口では、二〇〇五年の最高水位を一メートルも上回

り、激流が襲いかかりました。幸い五年の歳月をかけた改修の成果で難を免れましたが、恐るべき水勢です。頑丈な堰は残ったものの、対岸の広大な中洲が七月二十九日、一挙に洗い流されて消えてしまいました。

守られたマルワリード水路

二五キロメートルの用水路内でも、至る所で鉄砲水に遭遇、特に新しくできた場所の決壊が危ぶまれましたが、殆ど無傷でした。大きな貯水池をいくつも作ったのが幸いして、水害を起こしませんでした。特に、ガンベリ沙漠の岩盤周りにある通称「Q2大池」の決壊は悪夢で、流入する水量は並みのものではありません。普段なら三〇センチ（水門付近）の水深で流れるのが、最高八〇センチに達しました。実に三万五千トンが一日で貯留したことになります。このため、各区の排水門を緊急に開放しましたが、排水路網の整備が役立ち、水害は起きませんでした。目立たず二年間積み重ねられてきた努力が真価を發揮したのです。用水路に頼る三千ヘクタールの農地は守られました。私たちのガンベリ試験農場の田畑も影響なく、水田の稲が青々と育っています。

穀倉地・カマ郡の被害

他の取水口のうち、シェイワ用水路は完璧に守られていました。最も被害を受けた

のはカマ取水口です。カマ郡は面積七千ヘクタール、人口三〇万、ナンガラハル州で最大の耕地と人口を抱えています。「カマ郡の豊作・不作がジャララバードの穀物価格を決める」と言われるほどです。しかし、ここでも渇水による沙漠化が進み、歴代の政権の手によって多くの取り組みが行われたものの、成果が上がりませんでした。このため、一時は人口が半減したと云われています。最も多くのアフガン難民を出したのも、この地域でした。「カマの取水口は絶対に成功しない」というジンクスができていたのです。

さて、ここに二〇〇八年十二月にPMSが着手した二つの取水口があります。仮工事に近いものですが、一時は全カマ郡を潤し、多くの避難民たち（約十万人）が帰農しました。PMSがマルワリード用水路で日本の堰の技術を会得、その成果が確かめられると、次々と他の取水口に応用されていきました。なかでも、カマ郡の取水堰建設は最大のものだったのです。

この貴重な取水口が、今回の大洪水で相応な被害を受けました。第一取水口では、急上昇した河の水位が土手を越えて流入、主幹用水路を土砂が埋めつぶしてしまいました。

第二取水口は、七月三〇日、仮工事中の水門を破壊して濁流が滔々と流れ込み、手

のつけられぬ状態となりました。カマ郡村落の一部も浸水しましたが、七月三十一日、PMSが突貫工事を開始、水路内に流入した洪水路を切り崩し、辛うじて犠牲を避けました。

しかし、対岸のベスード郡低地は浸水が激しく、多くの村落が孤立しました。周辺の地域を入れると、約八〇名が犠牲になったと報ぜられました。その後も断続的に豪雨が襲い、水がようやく引き始めたのは八月中旬のことでした。クナール河は、九州の三倍以上の流域面積があります。ヒンドゥークシュ山脈東部・北部全域の降雨が一度に起これば、恐るべき状態になることを身を以って知りました。

大洪水下の空爆

それでも、アフガニスタンの被害はパキスタンに比べると小さなものでした。その後の報道は胸を痛めることばかりでした。日を追って発表される犠牲者の数が増え、「パキスタン全体で被災者二千万人、死亡確認一五〇〇名、建国以来の犠牲」と伝えられました。

しかし、最大の打撃を受けたペシャワール付近、東部アフガン、カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）は、天災に加えて人災です。こともあろうに、米軍の空爆が休むことなく続けられ、「危険地帯」とき

バルカシコート事業完了!!



↑2022年9月、バルカシコート事業完了。完工式が行われ政府の役人、村人、PMS職員で喜びを分かち合った。(2022年10月5日)

→式典に参列する地域住民とPMS職員達。(2022年10月5日)

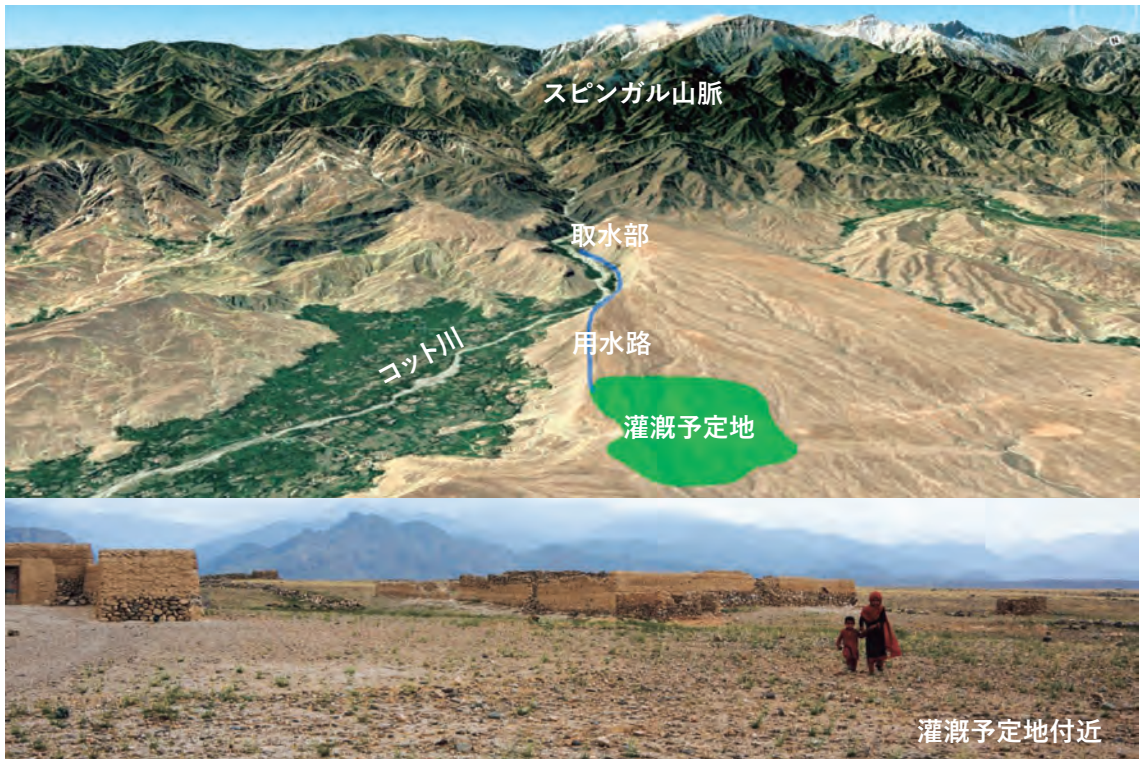
↓テープカットの後、無事に工事が完了されたことを神に感謝し祈りを捧げる。(2022年10月5日)



——バラコット用水路事業、始動——

PMSにとっては初めての導水方法を用いる新事業が始まった。スピンガル山脈を水源とするコット川からの取水と、川沿い崖地の湧水を利用した、約4.3kmの用水路計画。1年後の完成を目指し現地の村人や関係局役人に歓迎される中、非常に険しい崖に用水路を横断させる工事が、動きだした。





[上] 標高の高い取水部から水路はゆるやかな勾配で下り、約4.3km先で崖上の目標灌漑予定地に到達する。
[下] 崖上には湯ききた台地が広がっている。(2022年5月30日)



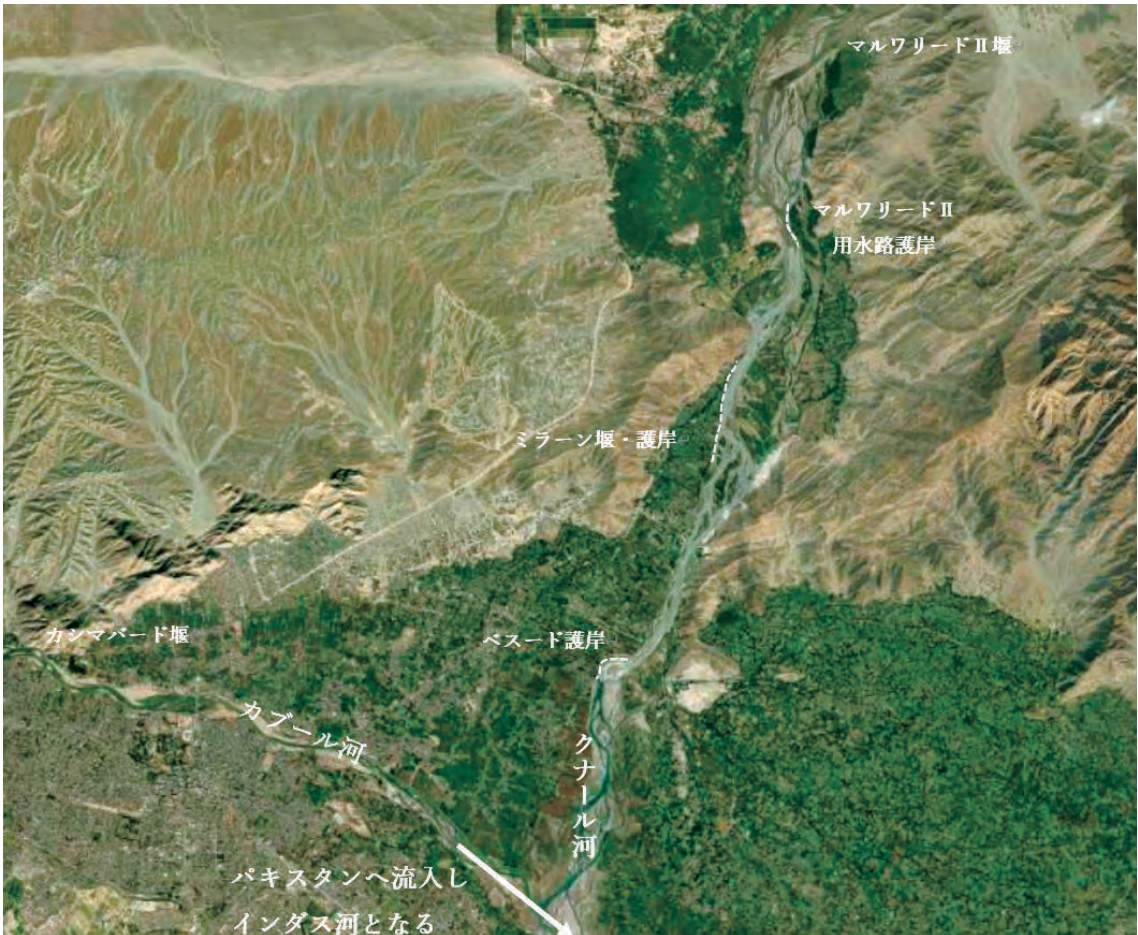
[左] コット川から下流の村まで引かれた既存の水路。これと同じ原理で、本計画では水量が増える夏季に川から取水する予定。[右] 年間を通して取水が見込まれる川沿い崖地の湧水。川と湧水からの取水によって、1本の用水路が引かれる。(2022年5月30日)



日本の技術支援チームからのアドバイスで、工事に先駆け地盤の支持力検査を行なった。堆積土からなる急勾配の崖地に水路を建設するため、安全面には最大限の注意が必要。(2022年9月20日)

大洪水、その後

8月下旬に発生した大洪水で、PMSは緊急補修工事に追われた。ベスード護岸、カシマバード堰は10月中に緊急工事を完了し、マルワリードⅡ用水路護岸、ミラーン堰・護岸は工事を継続。



[右] ベスード護岸 河の湾曲部が激流に洗われ、一部が崩落。マルワリードⅡの護岸補修と同じ要領で護岸幅を回復していく。10月10日に補修作業を完了。(2022年10月10日)

[左] マルワリードⅡ用水路護岸 洪水発生から約2ヵ月後のマルワリードⅡの護岸線、取水口から約4,000m地点。巨石を河の中心に向けて並べていき、水制を作る。更にその水制を埋設して護岸の骨組みにする。この作業を繰り返して護岸幅を拡げていく。(2022年10月24日)



ミラーン堰・護岸被害概要 (図は『アフガン・緑の大地計画』より引用し加筆)



ミラーン堰は、砂州を3つ繋げた全長約444mの長大な堰だが、今回の洪水で最上流の砂州3が流失。今後巨石の投入や柳の植樹で回復を図る。(左 2022年7月30日、右 2022年9月6日)



取水門前に堆積した土砂の除去。流路を塞ぎ、取水量を著しく減じていた。(2022年10月25日)



取水門上流の護岸の補強。取水門前から取り除いた土砂を再利用。(2022年10月27日)

◎ガンベリ農場 収穫の秋◎



ガンベリ農場では稲刈りが行われた。今年は作付面積8.8ヘクタールで約32トンの収穫となった。農場ではナツメヤシやモロコシ、豆類、柑橘類などの収穫も行われている。(2022年9月26日)



[左上] 成長状態を見るために掘ったサツマイモ。一株につき、1~2個のイモを付けていた。(2022年10月25日)



[右上] 農場内で焼き芋。(2022年10月25日)

[右下] できたての焼き芋を頬張るPMS職員たち。非常に甘く、近隣の州や郡に住んでいる職員たちが、栽培のため芋づるを持って帰った。(2022年10月25日)





実をつけたデーツ（ナツメヤシ）。2017年に在アフガニスタン日本大使館の支援金で、2ヘクタールに約500本が植樹されていた。5年ほどで結実する早生種で、中村医師も楽しみにしていた。昨年初めて実がついた。（2022年8月20日）



ガンバリ農場事務所で乾燥中のデーツ。今年は昨年より多く実がついたため、PMS職員たちに振る舞われる予定。皆今か今かと待ちわびている。（左2022年10月8日、右2022年10月12日）

ドクターサーブ中村とともに



中村医師の誕生日の9月15日、PMS職員は皆、記念塔の前に集い、ドクターサーブに思いを馳せた。アフガンの人々のためのオアシスとして造った場所で、職員達はゆっくりと穏やかな時を過ごした。(2022年9月15日)



誕生日を祝って食事会。(2022年9月15日)

2023年カレンダー

「人命水」

制作 ベシャワール会/PMS

B3判カラー

写真 13点+中村哲医師の言葉

定価1500円(税+送料込)



今年もカレンダーを制作しました。アフガニスタンの人々の生活に焦点を当てた写真に、中村医師の珠玉の言葉を添えています。ぜひお買い求め下さい(ご友人・知人へのプレゼント発送も承ります)。※お申し込みは同封の用紙、またはHPから。代金は後払い。払込用紙を同封します。

れて救援の手が届かない状態が続いています。ある地域では、遺体を収容しているところを爆撃され、罪のない村民二十数名が即死、多くの負傷者を出しました。こうして、復讐を誓う者たちが日々激増していきます。欧米軍は道義的に既に敗北しました。数百年に一度とも言われる大洪水に対して、私たちは人の無力さを覚えるだけでなく、天災さえ利用して殺戮をほしきままにする精神の荒廃、力に屈して弱者の立場に立てぬ臆病と無関心の蔓延を見ます。同じことが欧米諸国で起きたら、連日の大騒ぎとなったことでしょう。

同じ頃、コレラ大流行の危険が迫り、わがドラエヌール診療所でも死亡者が発生、現在まで約二〇〇名が治療されています。アフガン東部とパキスタン北西部で大流行するのは確実と見られています。昨年日本で「新型インフルエンザ」騒ぎがありました。

最大の挑戦

その時を思い浮かべ、格差は仕方ないとは思っても、何だか悲しくなります。

さて、今秋から私たちは大きな挑戦に乗り出します。「数百年は使える用水路」と豪語しても、取水口と取水堰は自然の猛威に十分に耐えるものでなければなりません。また、今回のような大出水の際、対岸の被害を増すものであつてはなりません。(略)

一般に大河川の工事は物量が必要で、マルワリード用水路でも予算の半分近くが河周りの工事に充てられました。自然と人としての危うい接点が取水堰と護岸です。相当地な努力と協力が欠かせません。

今回の災いを福に転ずべく、同農村地帯で生活する六〇万農民の生存を賭け、文字通り死力を尽くしたいと思えます。平和は戦争よりも努力が要ります。遠からず外国

軍は疲弊して去り、アフガンの話題も遠くでしょう。しかし、そこで暮らす人々はどこにも行き場がありません。どんな戦争熱も、憎悪をおおるヒステリックな政治宣伝も、私たちにはあまりに縁遠いものです。ひたすら豊かで平和な緑野を夢見て、汗を流すだけです。

変わらぬ温かいご支援、ご関心に感謝いたします。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承下さいますようお願い致します。

▼未使用の切手、書き損じハガキ(官製ハガキ・年賀ハガキ)をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ベシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです(払込用紙がついてきます)。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四折りましたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。(ポストイン等御遠慮下さい)

◎パキスタン大洪水・被災地支援報告

被災者にシエルターと食糧を！

——ベシャワールから

元PMS基地病院事務長／

TMS(タウンメデイカルサービス)代表

イクラムラカーン

壊滅的な被害

今年八月、パキスタンはかつてない大規模豪雨に見舞われました。政府は国家緊急事態を宣言。何百万人も市民が被災し、全国で一七〇〇人以上が死亡しました。また何千もの橋が崩落、数千の道路が完全に押し流され、数百万人が救援物資を受け取れない状態に陥りました。大半の地域では早期警報が発出されなかったため、市民は家屋の浸水が始まってやっと避難を始めるという状況でした。

ノーシェラ地区では強靱な精神とガッツのある女性の郡トップが、文字通り力づくで被災地の住民を家から引っ張り出し、そのお陰で多くの命が救われました。避難住民は被災者のために用意された近くの学校に避難しました。

◎州防災管理庁の報告による二〇二二年大洪水被害状況

死者一七〇〇人以上／負傷者一万二八〇

○人以上

破損家屋一四〇万戸／倒壊家屋八万五戸
被災道路一万三千キロ以上
被災した橋四三〇カ所以上
被災農地五五〇万エーカー
被災家畜一一〇万頭以上

上記被害は人が入ることが出来た地域から報告されたもので、現在も被災状況が伝えられていない地域があります。その多くは河川流域、道路から離れた地域、家屋がまばらに点在している地域です。これらの地域では水が全てを流して何も残っておらず、住民は安全な近隣地域や親類の家に身を寄せています。

被害の実態調査と救援

ベシャワール会は、これまでと同様に、今回の壊滅的な洪水のニュースを聞いて、被災者救援に多大な支援をしてくださいました。私たちは郡政府調整官の応援を仰ぎ、被災地を視察して被害の実態を調査しました。被災地では地元の中心人物(指導者)に同行を頼み、調査を進めました。

①被災状況調査

ベシャワールから十六キロ先のタルジャッバから開始して、アトック橋(ハイラバード)までの被災状況を調査しました。カプー



イクラムラ氏が調達したベッド。洪水被災者に届けられる。(2022年9月30日)

ル河沿いに五〇キロ、インダス河と合流する地点まで、実際に全被災家屋を見て回ったのです。そして被災状況と必要な援助を記録しました。調査を終えるのに一週間かかりました。

②救援物資配布

調査の翌週、我々は十全な警備体制を整えて前述の被災地を訪ね、これまでに以下の救援物資を配りました。

ベッド一九九台(四五台を追加準備中)
布団・シーツ類二一三セット(五四セット

を追加注文。来週配布予定)

蚊帳十五張

現金(生活再建に財政支援が必要な家庭のみ

中村哲医師の著作等

(価格は税込)

アフガン・緑の大地計画

Peace (Japan) Medical Services & ベシヤワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円

好評発売中!

わたしは「セロ弾きのゴーシュ」

中村哲が本当に伝えたかったこと 1760円

天、共に在り

アフガンに三十分の闘い 1760円

NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
☎03(3464)7311

希望の一滴

中村哲、アフガン最期の言葉

A5判192頁オールカラー 1650円

西日本新聞社 福岡市中央区天神1-4-1
☎092(711)5523

アフガンで考える

～国際貢献と憲法九条～ 726円

人は愛するに足り、真心は
信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 1078円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
☎03(5210)4000

医者、用水路を拓く 1980円

ベシヤワールにて 1980円

ダラエ・ヌールへの道 2200円

医は国境を越えて 2200円

医者 井戸を掘る 1980円

辺境で診る 辺境から見る 1980円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
☎092(714)4838

ほんとうのアフガン

1650円 光文社
文京区音羽1-16-6 ☎03(5395)8116

医者よ、信念はいらないまず命を救え!

1980円 羊土社

千代田区神田小川町2-5-1 ☎03(5282)1211

アフガニスタンの診療所から

814円 ちくま文庫

台東区蔵前2-5-3 ☎03(5687)2680

映像記録DVD

荒野に希望の灯をともし

～医師・中村哲の35年の軌跡～

[2021年発売] 2970円

アフガニスタン [16年発売] 2970円

用水路が運ぶ恵みと平和

アフガニスタン [12年発売] 2750円

干ばつの大地に用水路を拓く

[企画]ベシヤワール会[製作]日本電波ニュース社

を対象)五五六〇ルピー/世帯
(一)パキスタンルピーは約〇・六円)
二五日分の食糧(小麦粉、調理油、砂糖、紅茶)

来週以降は、被災直後に避難していたために我々が調査できなかった家庭を訪問する予定です。実際、彼らが最も深刻な被害を受けています。彼らは帰宅して全壊した家屋を建て直すか、より安全な土地に移って一時凌ぎの住処を作り始めています。政府は被災者支援すると表明していますが、これまでのところ現地では何も実行されていません。

私たちは、政府がどのような支援をするのか、様子を見ています。政府の支援は十分かもしれません。被災者は全壊した家屋の再建に財政支援をより必要としているかもしれません。物価は急騰し、労賃も上がっています。去年一袋三〇〇ルピーだったセメントは、現在一二〇〇ルピーになっており、ほ

かの建設資材も価格が高騰しています。
シェルター・食糧・暖衣を

洪水被災者が今すぐ必要としていることは、まず安全な地域に避難すること、彼らにシェルターを提供することが急がれます。これに関して政府は地元の学校を避難場所に指定しました。次に必要なことは、調理するにも道具のない被災者に食事を提供することです。現在、地域社会やNGOが食糧配布を開始しています。我々も被災者に食糧を配給しました。

政府は、今夏パキスタンを襲った前例のない大洪水の被災者の大半は自宅に戻り、ほんの一握りの人たちのみが最大被災地のシンド州の避難キャンプに住んでいると発表しています。

現在カイバルパクトゥンクワ州では気温が下がってきており、毛布や布団、暖かい衣服が必要とされています。我々は近いう

ちに被災地全域を再訪し、この目で政府の実際の救援状況を確かめ、さらにどのような支援が必要か見極める予定です。

最も困難で財源を必要とするのは被災家屋の再建です。我々のチームは定期的に被災地を訪問し、本当に支援を必要とする人々を特定して彼らに必要な救援物資と財政支援を提供する予定です。

必要なものを提供するため、ご支援くださるベシヤワール会の皆さまに、我々チーム全員から心よりお礼を申し上げます。TMSは日本の皆さまとパキスタンの被災者たちとを結ぶ唯一の絆です。支援の大半は皆さまから頂いています。私たちはベシヤワール会の皆さまへの感謝の気持ちを決して忘れません。

注・イクラムラ氏は中村医師がベシヤワールに開設したPMS基地病院の事務長だった方です。治安の悪化のため基地病院は二〇〇九年、イクラムラ氏が設立した現地NGOであるTMSに譲渡されました。

「菜の花基金」からの感謝とご報告

父 伊藤正之
母 伊藤順子

「伊藤和也アフガン菜の花基金」についてご報告いたします。

『子どもたちが将来、食料のことで困ることのない環境に少しでも近づけるよう力になればと考えています。』

ベシャワール会に提出した和也のワークシート「志望動機」に書かれていた言葉です。

事件後、全国の多くの皆さまからご厚志を賜り、「農業と教育」を柱に二〇〇八年十月「菜の花基金」を設立いたしました。

事件から今年で十四年が経ち、その間皆さまから多くのご支援をいただきました。

近年、私どもも高齢になり基金を続けていくことへの不安を感じるようになりました。この度関係ある方々にご相談させて頂き、二〇二二年十二月末をもって基金を解散することといたしました。

長い間、菜の花基金にご支援していただき心より感謝申し上げます。

また、私ども家族へもたくさん励ましをいただき、言葉では言い表せないほど感謝の気持ちで一杯です。重ねて厚く御礼申し上げます。

これまでの活動を通して、たくさんの方の温かい出会いがありました。和也の想いが結びつけてくれたものだと思います。家族の中だけでなく、多くの皆さまの中に和也が生きていることを感じることができ、日々一歩ずつ前を向いて進むことができました。和也が好きなアフガンの大地を踏みしめ、空気を感じ、生前話してくれた満天の星を見に行くという夢がありました。高齢になり叶えることはできませんが、皆さまのご支援でアフガンの子どもたちの力になりました。という想いは形にすることができました。菜の花基金には、日頃皆さまからご寄付、ご支援をいただき誠にありがとうございます。本来ならば、皆さま一人一人にお礼の挨拶を申し上げなければならぬところですが、この書状をもってお礼と報告に代えさせていただきます。

記

ご寄付はベシャワール会と相談し、農業支援や子どもたちの教育に使わせていただきました。

二〇〇九年三月 二〇〇〇万円（学校教材の購入）

二〇一〇年五月 二千万円（寄宿舎建設・農機具の購入）

二〇二二年九月 八二二万円（農機具の購入）
*現地と相談して教育にも使わせていただく予定です。

総額三千二二二万円

令和四年十月

「菜の花基金」のご寄付について

ベシャワール会会長

村上 優

二〇〇八年八月二六日にPMS農業部門ワーカーの伊藤和也君が亡くなった事件は、当時、ご本人の面接をして希望を伺い、送り出す手伝いをした者として痛恨の極みです。名古屋中部空港にお迎えに参りました。ご両親の慟哭される姿に言葉を失いま

した。以来十四年が経過しました。

ご両親はその後、農業復興を目指して植林や用水路事業に関わった和也君の活躍を伝え、遺志を継ぐ目的で「菜の花基金」を設立され、和也君を顕彰する活動が始まりました。和也君が亡くなった当時は、マルワリード用水路が、和也君が働いていた試験農場のあるガラエヌール溪谷を過ぎて、ガンベリ沙漠まで拡張する工事が困難を極めていた時期でした。また、用水路周辺の住民の祈りの場であるモスクや付属のマドラサ（寄宿舎付きの学校）建設も進んでおり、ご両親の希望で学校に時計を届け、寄宿舎



初夏の田植え。今年も無事収穫を迎えた。(2022年5月30日)

建築に寄付をいただきました。

二〇一〇年、マルワリード用水路が完成し、ガンベリ農園の開墾が始まりました。試験農場は、その後ガンベリに移され拡大されました。

ガンベリ農園はアフガン政府より貸与された二三〇ヘクタールの土地で、PMSが続く限り運営を任されています。和也君も力を注いだ農業復興を目指して、開墾や砂防林の植樹などが続けられました。現在は大部分が開墾され、米・麦・トウモロコシなどの穀物、野菜、柑橘類の果物、ナツメ

ヤシなどを栽培、酪農、養蜂も盛んになってきました。ドラエヌールには今も菜の花が咲き、採蜜が行われています。和也君が手掛けていた救荒作物としてのサツマイモ栽培にも再挑戦しています。

この度、ご両親より「菜の花基金」の活動を一区切りとして終え、基金をペシャワール会に、とのお申し出をいただきました。寄付金の用途についてはPMSの幹部と相談して、農業部門で長期に使う大小の耕運

若き日の中村哲医師(前号より続く)

久山療育園理事長 宮崎信義

一九六七年七月十七〜二十〇日のルーター阿蘇山荘での九州学生YMCAの夏期学校に中村君と参加しました。九州大学文学部哲学科の滝沢克己教授の「インマヌエル(神、我らと共にいます)」という深遠な基調講演があり、共に学び語り合いました。滝沢先生は若き日のドイツ留学時に、二十世紀最大のキリスト教神学者と言われるカール・バルトに師事された方です。

一九六八年に九大医学部は八カ月間のストライキに突入し、大学管理や医療制度の危機を訴えたわけですが、お互いに運動し

機を中心とする農機具の購入と、子どもたちのためにマルワリード用水路横に作られたマドラサと寄宿舎の整備に当てさせていただくことにしました。マドラサには机や椅子、井戸、ソーラー発電設置に加えて、壁や窓の大幅な修繕を計画しています。

ここに謹んでご報告し、「菜の花基金」を運営されてこられた伊藤和也君のご両親支援者の皆様の活動に、感謝を述べさせていただきます。ありがとうございます。

ながらも、この時はのんびりとした日を過ごしました。彼はその前の教養部(医学進学課程)でも余裕を持ちながら自主留年をしましたが、その時もカリキュラムがせましく感じられたのでしょうか、当然であるかのように休暇を自分でとったようです。時間に対するこのような処し方が、パキスタンやアフガニスタンの風土に合致したのではないかとも思えます。この頃も立花山や宝満山、背振山など手近な自然を愛し、蝶を採集したり、今言うアウトドアがびったりと似合っていたようでした。この自然に親しむ姿勢が、精神疾患や神経病の学びにも繋がったらしく、神経解剖で緻密な神経の走行を根気よく描写する作業に没頭していました。

一九六八年六月二日、二二時四八分頃、アメリカ空軍のRF-4Cファントム偵察機が、当時、九州大学箱崎地区内で建設中

の大型計算機センターの屋上に墜落しました。この時には、中村哲兄と私は共に名島の九大YMCA寮に入寮中で、墜落時の轟音を聞き、九大箱崎キャンパスに駆けつけたのですが、米兵が通路を固めて私たちに自動小銃を向けました。その時には、日本が独立国であるのは幻想ではないかと思つたものでした。この事件も学園紛争に火をつける役割を果たしました。

彼の人柄の特徴の一つは、金銭に対して淡泊というか恬淡けんたんだったことです。お互いに貧乏学生でしたが、何か食べようと言うと無造作にポケットからお金を取り出していました。お腹をすかしてもお金がない時は、ある者が出すといった具合でした。こうした姿勢は、彼の文章に通じるように思われます。

彼から見せられた文章や手紙は、野線のない白い紙に一見無造作に書かれたもので、所々に訂正した箇所がありました。実に簡潔で自然な文章でありながら深い意味を感じさせるものでした。修辞文のような形容詞の多用や回りくどい表現は一切ない美しい文章でした。これは、彼の著書を読んだり講演を聴かれた方なら気がつかれると思います。

青年医師時代（一九七三年から）

語学については天性の才があり、受験や単位を取るためというのではなく、その言語

を使う人や文化に興味があったのではないかと思われれます。試験とは関係のないドイツ語会話にも興味を持っていたほどで、私はしばしば彼の語学の知識に助けられました。この延長線上に、バイリンガルどころかマルチリンガルともいえるべき、英語・ウルドゥ語・パシュトゥ語・ペルシャ語などの習得があったのです。

一九七三年三月に九大医学部を卒業し、精神神経科の専門医として国立肥前療養所に勤務されました。

一九七七年頃、私は所属していた九大医学部呼吸器科の会合後の二次会で、中洲のスナックで出会った福岡登高会の新貝勲さんから「報酬はあまり出せないが、我々と一緒にヒマラヤに行ってくれるドクターを知らないか」と尋ねられ、「そのような物好きな医者はいないでしょう。いや一人いる」と言つて中村哲君を紹介しました。

一九七八年に、中村君は福岡登高会の同行医師としてヒンドゥークシュ、ヒマラヤのティリチミール登高に参加します。その後の経過は彼の著書に詳しく書かれています。行程で出会った現地の人々の病氣（一般的な病氣や熱病、中でも結核が多かった）に苦しむ姿と純朴さに心打たれ、再会を約したとのことでした。

医師の場合、一人前になるためには大病院などしかるべき医育機関による長期間の研修が必要とされます。それが大学医局

の封建制に組み込まれたり偏った専門志向に繋がるといふ弊害がありました。

中村君の場合は、医療を必要とする人間の側のニーズに自分を合わせるといふ選択をしていたようで、羨ましい限りでした。

内科的な知識・技術が必要であれば大牟田労災病院や徳洲会病院へ、麻酔や脳外科が必要であれば久留米大学へ、ハンセン病による機能障害や壊死の手術の技術習得のためには韓国へといった具合に、人間の迷惑ではなく医療本来の必要に応じて学びを進める——実に爽やかな印象を与えられました。それを世間は変わり者と言うわけですが、このように当り前の選択も彼ならではの決断を必要とするものと改めて思つたものでした。

海外医療協力への道

一九八三年四月に、JOCSS（日本キリスト教海外医療協力会）理事会にて、JOCSSワーカーとして派遣が決定（福岡徳洲会病院勤務中）しました。語学や熱帯医学の研修（英国リバプール）を経て、一九八四年五月にベシヤワール・ミッション病院に着任しました。現地の人々に必要な麻酔科・脳外科・実践的な内科学、そして日本では過去の技術となりつつあったハンセン病再建外科などを海外で研修しました。

当時の日本の医学・医療は、正しく研修しようとする、大学医局という閉鎖社会

表紙写真によせて

9月15日のガンベリ記念公園

中村先生の誕生日である9月15日に、PMSの職員たちはガンベリ公園に集まり、ドクターサーブ中村記念塔の前でささやかに集会を行ないました。

職員たちは中村先生に祈りを捧げ、公園でクリケットやバレーボールをして楽しみ、羊を屠って食事会をしました。

ペシャワール（パキスタン）の基地病院時代から、中村先生の誕生日には近くのグラウンドでクリケットやバレーボール大会を催し、時には先生も選手として参加していました。試合が終わると、ビスケットとペプシコーラが振る舞われるのがお約束で、皆子どものように喜んだものです。

今年の誕生日、PMS職員たちが記念塔の前で思い思いにくつろぐ姿を中村先生が微笑んで見守っているようです。

この公園は、「アフガニスタンの人々が戦争や様々な問題を忘れ、ゆっくりと穏やかな時を過ごしてほしい」との中村先生の願いが形となったものです。今ではアフガニスタン各地からたくさんの方が訪れ、中村先生の行ないに思いを寄せる、憩いの場になっています。

かそれに匹敵するような国立病院や公的大病院に頼らざるを得ず、従属的な人間関係（誇張はあってもいわゆる「白い巨塔」「象牙の塔」）が形成されていたことは確かでした。彼は、私にしばしば「まだ大学病院にいるの」と言ったように、そのような体制に囚われることはありませんでした。その型破りをうらやましく感じると同時に、患者の必要に応じて知識や技術を修得するのが医師の真実の姿だと思いました。

ペシャワールからアフガニスタンへの道

アフガニスタンに侵攻したソ連軍が一九

八八年五月から翌年二月までに撤退しました。中村君は八九年にJAMS (Japan-Afghan Medical Service) を設立、九一年にはアフガニスタン北東部の三診療所を拠点として山岳無医地区の診療活動を開始し、九八年四月にはペシャワールにPMS II Peshawar -kai Medical Services 病院（七〇床、建坪一千坪）が建設されます。日本の支援者から三五〇〇万円の援助が寄せられました。

二〇〇〇年からは、医療の枠を超えて現地の人々の生存と人間の尊厳を大切にしたい「生命の水」の計画に進展しました。アフガ

PMSの動き

- 8月27日～ 大洪水で各地の堤防が浸食被害を受け、ベスード地区等で緊急護岸工事開始
- 9月3日 ナツメヤシ初収穫
- 9月15日 中村医師誕生日、ガンベリ公園に全職員が集う
- 9月29日 バルカシコート事業完了
- 10月5日 バルカシコート事業完工式
- 10月11日 ジャララバード市の中村広場オープニングセレモニーに招かれ出席
- 10月16日 バラコット事業起工式
- 10月末 新規灌漑事業に向け、FAO・PMS合同調査開始

ニスタン国内に井戸（二六〇〇基以上）を掘削、更にはクナル河を水源とする灌漑事業に邁進します。二〇一九年十二月四日に中村哲医師が殉難した時点で、クナル河から全長約二七kmの用水路（マルワリード用水路）建設などによって一万六五〇〇haが緑地・農地に変わり、約六五万人の生活が可能になりました。

「人は愛するに足り、真心は信するに足る」「二隅を照らす」という言葉を伝えて彼は逝きました。彼の遺志は、ペシャワール会を初めとする支援者や共感する全世界の人々の記憶から消えることはなく、現地の人々を中心とする「緑の大地計画」や平和の創生が続いていく、と信じて稿を終えます。

●事務局だより

*中村哲医師のご逝去から三年の月日が経ちました。十一月二六日に追悼の会を営み、これからの活動に向けて、この三年間の歩みを報告いたしました。皆様のご支援により、中村医師の事業と希望を引き継ぐことができ、厚く感謝申し上げます。

中村医師の詩句を紹介いたします。色づいた柿の葉をあしらった紙にしたためられていました。

柿の葉の
散りて荒れ地に
緋の千畳
ひとの生きるもかくなれば
なんぞ墮つるを恐れなむ

二〇〇三年十月の作です。この年の三月にはマルワリード用水路の起工式が行われました。中村医師の覚悟が秘められている詩句のように感じられます。*「急速な円安による送金額減を危惧しています。少しでもお役にたてれば嬉しいです。パキスタンにも一部をまわしてください」との便りをいただきました。イクラムさんの報告にあるように、ベシャワール会もささやかながら支援しております。

この度の大洪水は、地球温暖化によるヒンドークシユ山脈の氷河融解が被害を甚大にしたと考えられています(七頁参照)。ある気候科学者は、「パキスタンは、十一月のCOP27(国連の気候変動会議)で異常気象による損失と損害について訴求する必要がある」と指摘しました。異常気象で被害を受けやすい途上国は、温室効果ガス排出量の多い先進国に資金支援の拡充を求めているのです。

*今年も温かいご支援をありがとうございます。皆様の健康と来たる年の平穏をお祈りいたします。
●PMS支援室より

*中村先生は、「皆が欲しかったのは本当は食べ物だった。にもかかわらず、都会人の感覚で援助が行なわれた。ご飯がちゃんと三度三度食べられて、家族が仲良く一緒に生きること、これ以上の望みを持つ

人は少ないと思います。故郷の農村を回復すること、これがアフガニスタンの復興の基礎だと思ふ」と二〇〇六年に放送された「知るを楽しむ この人この世界」(NHK TV)の第五回で話している。

二〇〇一年のタリバン政権崩壊後に始まった「アフガン復興支援」は、昨年八月末に全ての外国軍が撤退するまでの二〇年間、戦争と併行して進められた干ばつは中村先生が訴え続けたように進行し、政権が交代した昨年は、年初に国連が餓死線上に一四〇〇万人、飢餓線上に二千万人と発表したあととも降雨はほとんどなかった。今年の六月中頃からやっと降り始めた雨は八月には大洪水をもたらした。しかしそれ以降これまでの降雨は数日間しかなく、昨年に続き今年も主食の小麦の作付けは難しい。

時々報道されるアフガニスタンは相変わらず都市部からの発信である。国土の四分の三が山岳地帯であるアフガニスタンはこれから冬に向け厳しい状況に直面する。人口の大部分を占めている農民の母親たちの「子供にご飯をちゃんと食べさせたい」という叫びは国際社会に届かない。中村先生は用水路を拓いて農村部を回復し、周辺の住民たちは自給自足の暮らしを営み希望にあふれている。ここにアフガン復興のヒントが示されている。

鳥取の村から

二〇一一年六月に山本薫里さん達とベシャワール会現地活動写真展を鳥取、米子の両市で開きました。一九年五月に中村哲医師を招いて講演会と写真展を開催。二〇年三月、鳥取市谷地区公民館でDVD「用水路が運ぶ恵みと平和」とお話の集い。同年九月十七日に「ベシャワール会とつとり」を設立、会員約四〇名。二一年十月、鳥取市立河原中学校「中村哲医師の生き方に学ぶ」フォーラム。二二年十一月、地域の活動家の参加を得て三会場で追悼セミナーを開催しました。私たちは、子どもや町の人々に中村哲医師の思想と仕事を知ってもらうことが大事だと考えて活動しています。会長は小谷治郎平さん、事務局長は長谷川誠さんです。(前代表・浜本純逸)

会 則

- ① 本会の名称をベシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州(現カイバルパクトウンクワ州)ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局を〒八一〇—〇〇〇三 福岡市中央区春吉一―一六八 VEGA天神南六〇一 Ⅸ九二―七三一一―三三七二 内におく。

総会、現地報告会は原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。